

詩篇 1 : 3 - 4 (パワポ)

Preface

続けてもう少し、主題聖句の詩篇 1 篇の御言葉から学んで行きたいと思っております。

元旦礼拝から 3 回に渡って参りましたが、全人類にとって一つの共通項があるとすれば、それは、「幸いでありたい」という願いでしょう。

そして聖書は、「すべての人が幸いであって欲しい」という神からの語り掛けです。

ここに提示されている道以外には、人は決して、幸いを見出すことは出来ないと語ります。

それゆえに聖書は、時代や場所を超えて誰にでも当てはまる普遍的な書物であり、人生の教科書であり、たましいの指針書でもあると言えるでしょう。

この中には、人が生きて行く上で直面するだろう、また経験するだろうありとあらゆる境遇や身の上、人の生き様の全体が記されています。

どの時代にあってもそぐうメッセージであり、廃れることのない永久の真理が語られています。

古ぼけて時代遅れになるようなことはなく、今日においても、何の躊躇もなく真っ直ぐに、この世界の本质や状態を単刀直入に言い表す最も時宜適切な書物です。

41 年前、私が小学生の頃に憧れて親に買ってとせがんでも買ってもらえず、何とか、もう既に社会人になっていたお姉ちゃんに頼んで買ってもらったファミリーコンピュータという家庭用ゲーム機は、今では古道具と化しましたが、41 年前の世界においても時宜適切であった聖書の言葉は、今の時代にあっても変わらず新しく、現代的なメッセージです。

なぜならば、変わることのないテーマを扱っているからです。

「幸い」という不変のテーマについて、永遠にお変わりになることのない聖なる神がお語り下さっている神の言葉だからです。

それゆえに、これまで見てきましたように、幸いな人とは、主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさみ、思い巡らす人です。

人が、喜びだったり、楽しみだったり、悦や幸せを感じる時というのは、新しいものや新しさを手にしたり、身に付けたりする時だと思いますが、神の言葉は、いつでも、霊的な生きものである人間に、新しさ、瑞々しさを抱かせて下さる幸いの源です。

1月から始まった聖書通読表を用いて聖書を読み始めたある青年の、「毎日、聖書を読むことが楽しくて仕方がなく、明日、また聖書を読むことが待ち遠しいです」という告白を読んだのですが、しみじみと嬉しくなりました。

「主の教えが喜びとなる幸いを味わわせて頂いているんだなあ」と、本当にしみじみと嬉しく思いました。

いつも新しく瑞々しいまことの幸いということを考えていく上で、聖書以上のものは神様から私たちに与えられていないでしょうし、詩篇1篇にその内容が凝縮されていると言っても過言ではないということを今一度味わわせて頂きたいと思います。

Part One

先月、詩篇1：1－2節の御言葉を通して、「人は、直接幸いを求めることによって幸いになろうとする過ちを犯す。また、幸いを、環境や境遇などによって左右されるものだと考えてしまいがちだけれども、究極的に幸いとは、唯一まことの神との関係の中で育まれていくものであり、その関係によって培われる私たちのたましい、霊の状態による」と教えられました。

もし幸いというものが、環境や条件などに左右されるものであるならば、なんと幸いとは得難く、継続の出来ない不安定なものでしょうか。

環境や条件や状態という人の外側のことに左右されずに、安定していつもあるのが、まどろむこともなく、眠ることもなく、瞳のように守って下さる主が教えて下さるまことの幸いです。

外側のことではなく、私の内なる人が、まことの神とどういう関係にあるのかに全面的に掛かっているのが、神の説くまことの幸いです。

ではなぜ、私たち人は、聖書が語るこの幸いを信じ、ずっと継続して体験し続けることが出来ないのでしょうか？

それは、「人々が、自分自身についてあまりにも無知であり、自分たちの真の姿を見ることが出来ていないためだ」と聖書は語ります。

どういう意味で無知で、見ることが出来ていないのか？

「自分は正しく、人が間違っていると思ってしまう無知、自分の目の中の丸太ん棒のような大きな罪は見え、人の目にある小さなちりやおが屑にはよく目が行き、よく発見し、そればかりが見えてしまう神をも恐れぬ高慢ちきな罪深き私自身の醜い汚い姿を見ることが出来ていないためだ」と、聖書は教えて下さいます。

そのような私たち自身の汚い汚れたざる賢い偽善という巧妙な悪しき真の姿は、主の教え、つまり聖書が語るメッセージを信じないことには、決して悟ることは出来ないでしょう。

そして、それを悟る、悟らされることが、神の説くまことの「幸い」における必須項目です。

例えば、私たちの普段の実生活だけでなく、新聞や報道などの言論においても、私たちの普段の実生活においても、いつも、他者の悪さばかりを指摘し、悪さを指摘される側でなく、自然と指摘する側にまわり、指摘する側である自分自身を無意識のうちに正しい者とみなしてしまいます。

語られているその悪さが、私事として迫って来ません。

でも聖書は、「その悪さ、あなたの悪さですよ」と、歴史の断片を通して、実在した人物たちの実体験や生き様を通して、「その悪しき事実と実例は、正にあなたのことでもありますよ」と、単刀直入に語ってきます。

そして、ただ悪さを指摘するだけでなく、その悪さからの救いを示し、その示された救いを受け入れた者と、受け入れなかった者との対比を記します。

そして今日の聖書箇所詩篇 1 : 3 - 4 には、その対比が記されています。

木に例えられる幸いな人・正しい者と、糲穀に例えられる悪しき者です。

提示された神の救いを受け入れた幸いな人、受け入れなかった幸いではない人です。

Part Two

詩篇 1 篇の著者だと思われるダビデは、聖霊なる神の愛によって語りました。

「聞きなさい。世の中には二種類の人がいる。いや、二種類の人しかいない。即ち、流れのほとりに植えられた木のような正しい者か、風が吹き飛ばす糲穀のような悪しき者である。

あなたがたが、この二つのどちらに属するのかわによって幸いでもあれるし、幸いではあれない。

悪しき者のはかりごとに歩み、罪人の道に立ち、嘲る者の座に着く人は糲穀で、主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ人は木のようなのだ。

ならば、あなたがたは、糲穀なのか、木なのか」と問うてきます。

前回のメッセージの中で、「悪しき者」とは、所謂、悪人と言われる人を意味しているのではなく、もっと広い、「神はいない」というすべての人、「神の言葉に価値を見出さない、見出せない、求めない、捨てる人々のことだ」と、聖書の御言葉から探っていきました。

ということは、「正しい者」とは、倫理道徳的に素晴らしい人とか、人徳がある人のことではなく、「神はいる」、「唯一まことの三位一体なる神を信じている」、「その神が人としてお生まれなされたのがキリストである」、「その方の前にあって止めどもなく底なしの汚れた貧しい罪人であることを心底認める」、「神の言葉を慕う」、「神の言葉が宝である」、「神の言葉を前にしては申し訳なさばかりが募ると同時に、感謝としか言いようがない」という人のことを意味するでしょう。

そして詩篇 1 篇は、この「悪しき者」と「正しい者」という違いがもたらす結果の甚だしさ、とてつもなさ、甚大な差異を深刻に語ります。

月とすっぽん、雲泥の差どころではない、かすりもしない違いを語ります。

もう一度お読みいたします。

詩篇 1 : 3 - 4 (パワポ)

今ここで比較しているのは、二本の木の比較ではありません。

ブドウの木とオリーブの木、梅の木と桜の木、または、同じブドウの木同士、桜の木同士の違いを比較しているわけではありません。

全くもって比較にもならないものを比較しています。

木と穀類です。

根本的に、本質的に、比較にもならない、比較も出来ない、存在そのもの自体全く違うものを比較しています。

この二つの間に共通点と言えるものは、何一つ、一切存在しないことを強調しようとしています。

つまり、まことの神を信じる者と信じない者の違い、主イエス様を信じる者と信じない者の違い、神の言葉を慕い求める者と慕い求めない者の違いです。

同じ人間であるはずなのに、全くもって、同じ種類の存在・生きものではないかのようにその違いを、明暗を分けています。

そして、私たちに問うてきます。

「果たして、その違いをあなたがたは、どれほどに認識出来ていますか？」とです。

私たちはどれほどに、神を信じる者と信じない者との違い、キリストを信じる者と信じない者の決定的な違いを認識出来ているでしょうか。

もしこの違いをこの詩篇 1 篇のレベルで認識出来ているならば、イエス様を伝えずにはいられなくなることでしょう。

世の中を毎日生きていくと、キリスト者でさえもこの違いが薄れて行ってしまい、見えて来なくなっていくようなことが起こるように思います。

「同じ人間じゃないか」と、「みんな一緒だ」と、「同じように食べ、同じように飲み、同じように住む者同士、みんな仲良くしていこうじゃないか」と、表面的な取り繕いばかりに気を取られるように、サタン悪魔は、私たちの目を日々曇らせようとします。

そして、曇ったならばしめたものです。

唯一まことの神を信じるのか信じないのか、主イエス様を信じるのか信じていないのかの違いよりも、どれだけ品行が素晴らしいのか素晴らしいのか、どれだけ出来る人なのか出来ない人なのか、どれだけ使える奴なのか使えない奴なのか、同じ趣味なのか趣味じゃないのか、同じようなことが好きなのか好きじゃないのか、どれだけ利益となる人なのか利益とならない人なのか、どれだけ得なのか得ない人じゃないのか、好きか嫌いかな等の表面的なことでも人を見、人と

接し、キリストを信じているのか信じていないのかという、人にとって最も重要なことにおいて平静を装うようになります。

その平静を装った端的な歴史的事実、痛みが、天皇崇拝を礼拝プログラムに組み入れ、君が代を礼拝の中で斉唱し、神社参拝を日本の文化だと受け入れて行った戦中の日本の教会の姿でしょう。

そして、現代日本においても、そのあとくされが残っているかのような姿、平静を装ってはいないでしょうか。

イエス様は、私たちに、平静を装わせるためにこの地にいらっしゃったのではなく、「聖なる波風を起こすために来た」と、「その風によって起こされた波に乗ったならば、ただではいられない人に変えるために来た」と仰ったことがあります。

マタイの福音書 10 : 26 - 39 (パワポ)

イエス様のことについて聞いたことのない方が、この日本の地に、この土浦の地に、つくばの地に、阿見の地に、かすみがうらの地に、私たちの周りに、どれだけたくさんいらっしゃることでしょうか。

クリスチャンと言われる者たちが、キリストを信じる者と信じない者の違いを、木と穀の違いほどに分かっているならば、そのことが最も心を痛める理由となるでしょうし、祈りの課題となるでしょうし、天国に引き上げられる前のこの地上における最も大切な使命、目的、目標となるのではないかと思います。

でも、いつのまにか、この世を栄華と見なし、人の目に栄華と写る錯覚させているサタンの手の上で、世を生きている中であやふやにされ、分からなくなってしまいうらいが私たちにはあるのではないのでしょうか。

それゆえに、耳に心地の良い話ばかりを御言葉から求め、教会に求め、牧師に求め、クリスチャン同士求めているうちに、「心地よいことを語りなさい。だましごとでもいいから」ということになってしまっているのかもしれない。

キリスト者は、聖書が、慰めを語るならば慰めを語り、癒しを語るならば癒しを語り、救いを語るならば救いを語り、導きを語るならば導きを語り、守りを語るならば守りを語ると同時に、

悲しみを語るならば悲しみを語り、裁きを語るならば裁きを語り、神の怒りを語るならば神の怒りを語り、終末を語るならば終末を語り、叱責を語るならば叱責を語り、罪と罰を語るならば罪と罰を語らなければならないはずだと思いますが、いつのまにか、厳しい辛辣で生々しい言葉は避け、心地の良い話ばかりをもって神とし、神の言葉としてはいないのでしょうか。

だからいつの間にか、木と穀類ほどの違いさえ分からないかのように、唯一まことの神を信じることと唯一まことの神を信じないこと、キリスト信じることとキリストを信じないことの、比較にもならない、比較も出来ないほどの大きな違い、差異、隔たりが見えなくなってしまう、薄めてしまい、あやふやにしてしまうのかもしれませんが。

Part Three

詩篇1篇の著者が語る御言葉の意味は、木と穀類に例えられる、キリスト信じる者とキリストを信じないものには、共通点が一切ないということです。

この二つは、完全に対照的です。

そして、「どれほどにこの事実を理解出来ていますか」と問われているような気が致します。

これまで長いこと見てきましたエペソ書の使徒パウロ先生の祈りの言葉にも、そのことが良く表されています。

エペソ人への手紙1：18－19（パウロ）

「神をキリストを信じる者とされたことがどれほどに深刻で物凄いことなのかを悟り、神をキリストを信じないことがどれほどに深刻で物凄いことなのかを知ることが出来ますように」と祈ります。

「何かの願いを叶えて下さい」と祈るのではなく、「神を信じることと信じないことの甚大な違いを分かるようにして下さい」と祈ります。

キリスト信じる者と信じない者の違いは、月曜日から金曜日まで働いて、週の初めの日の日曜日に教会に行き礼拝に出席するとか、お酒の量を減らすとか、タバコを止めるとか、してこなかった慈善活動やボランティア活動をするようになったとかという、それまでの生活習慣を改善する程度の違いではありません。

品行方正なのか、そうではないのかという違いでもありません。

人間の本質における根本的な違いです。

キリスト信じていなくても、いくらでも倫理道徳的に見た時、誰もが素晴らしいと言えるような生き方をしておられる方々がいらっしゃいます。

道義的に見て、社会の慣習に倣って判断した時、善だと思える人は沢山いらっしゃることでしょ。

善行に生きている人、生きられている人は少なくないと思います。

でも、もし、その人がキリストを信じておられないならば、キリストを信じている者たちとは本質的に違います。

例えば、聖書に登場してきます双子の兄弟エサウとヤコブは比較した時、エサウの方がヤコブよりも正直な人で、全うに生活しているように見えます。

でも聖書は、「神さまが愛されたのはヤコブだった」と記しています。

人は、うわべで人を判断するかもしれませんが、神は心を、その人の中心を見るお方です。

もちろん、その行いや生き方も問われるようになって行きますが、その行いの根拠が自分なのか、神なのかということ問われます。

その人の根幹、根底、奥底にイエス様がいるのかいないのかを最も大事にされるお方が主なる神様であり、その人が何者なのかを決定づけます。

詩篇1篇の著者ダビデは、この決定的違いを、流れのほとりに植えられた木と風に吹き飛ばされる籾殻に例えたわけです。

新約聖書でも、ニコデモという町の有力者との会話の中で、イエス様は、「キリスト者とは、それまでの自分に何かを足し、付け加え、付加価値を付けるようなことではなく、神にあって新しく生まれた人です」と仰いました。

ニコデモは、人間社会における有力者・強者でありましたので、それまで自分が培ってきたものをもって、または、何かまたそこに付け足すことによって、キリスト者となれると思っていたようですが、そうではありませんでした。

ヨハネの福音書3：3（パウロ）

新しく生まれなければならない、全くもって別の人にされたというのがキリスト者です。

第二コリントに行ってみましょう。

コリント人への手紙第二5：17（パウロ）

過去の姿よりも若干良くなったとか、出来なかった逆上がりが出るようになったとかという程度のもではなく、別人です。

新しい被造物です。

天地万物を創造された神なるお方が、過去に一度も存在したことの無い新しいものをお造りになられたというのがキリスト者です。

もう一箇所見てみたいと思います。

エペソ2：1，5（パウロ）

「クリスチャンか、クリスチャンでないかの違いは、死といのち程に違う」と言います。

「死んで終わっていた者を、新たないのちをもって生きるものへと移された」と言います。

そして詩篇1篇では、この違いを、いのち豊かな流れのほとりに植えられた木と、いのちのない籾殻のような違いだと例えているわけです。

聖書は、イエス様を信じた人のことを義人、または正しい人と言います。

「正しいとは、私たちの行いに掛かっているのではなく、主イエスを信じたかどうかにかかっている」と言います。

もちろん、イエス様を信じたことは、当然行いとして表れるでしょうが、私たちの行いが、義人や正しい人の根拠にはなりません。

神と繋がっている人が、キリストと繋がっている人が、流れのほとりに植えられた木のような人、正しい人です。

即ち、正しいとは、どこに身を置いているのかということです。

私の信念に、私が習得してきたことに、私の考える正しいということに身を置いているのは、正しい人ではなく、籾殻です。

私の信念を折り、私が習得してきたことがキリストゆえにちりあくたと心底思え、私の考える正しさの危うさをいつも神の前において認められる、心の貧しい人のことを正しい人と言います。

キリストに繋がっている人のことを、正しい人と言います。

「私は本当にみじめな人間です。誰がこの死のからだから、私を救い出してくれるでしょう。しかし、私たちの主イエス・キリストを通して神に感謝します。なぜなら、神の右の座についておられるキリストが、みじめな私たちのために執り成して下さることによって、なにものをも、人にとって最大の敵である死でさえも無力と化す、神の愛において圧倒的な勝利者とされたからです」（ローマ書7：24－8：37）という使徒パウロ先生の告白に身を置く人を、正しい人と聖書は言います。

私たちは、聖書の言う正しい人でしょうか？

それとも、世の唱える正しい人もどきでしょうか？

キリストに繋がっている正しい人でしょうか？

キリストに繋がっていない籾殻でしょうか？

キリストの言葉が、与えられたいのちの永続的な新しさを実感させて下さる豊かな流れのような水となっている幸いな人でしょうか？

または、キリストの言葉以外の言葉に身を置いている、籾殻のような悪しき者でしょうか？

籾殻ではない、悪しき者ではない、流れのほとりに植えられた木、正しい者・幸いな人として歩むことを毎日決意し、味わわせて頂く者でありたいと願います。

来週は、風に吹き飛ばされる籾殻の4つの特徴について考えていきたいと思えます。

お祈りいたします。

祝祷：詩篇1：3－4